

反抗のドラマ

一八八一年三月一日、ロシア皇帝アレクサンドル二世が暗殺された。暗殺を実行したのは、じつは、アナキストではなく、「人民の意思」という名のロシアの革命家グループであったが、アナキストたちは、暗殺者の行動に共鳴し、ロンドンで開催されたアナキスト大会（一八八一年七月一四日―フランス革命記念日のバスチュー・デー）

で、「行動による宣伝活動」を押し進めることを決定し、国際的なアナキスト組織の結成を決議した。

実際には、この団体は、その後、二度と会議を開けなかったのであるが、一般のひととはテロ行為のすべてが国際的アナキスト組織（ブラック・インタナショナル）の陰謀だと思ひこむようになった。

ロシア皇帝の暗殺とアナキスト大会の決議は、ヨーロッパ中に分散していたアナキストたちの地下組織を活気づけ、彼らの暴力行為をますますエスカレートさせる結果となった。

フランスのアナキスト機関紙「ル・ドラボ・ノール」（黒旗）は爆弾の製造法を掲載し、ほかの機関紙もアナキストの個人テロを奨励しはじめたのである。

アナキスト、アメリカ上陸

一八八六年五月五日、シカゴのヘイマーケット・スクエアで事件が起こった。前日のストライキで、警察がストライキ参加者に発砲した事件に憤激した労働者が、抗議集会を行なっている真只中に、爆弾が投げ込まれたのである。デモの規制にあたっていたひとりの警官が即死したため、警官隊が発砲、労働者もピストルを持っている者はすぐに応戦した。

その結果、警官、群衆の双方に多数の死傷者が出て、シカゴは一瞬のうちに恐怖の街と化した。事件後、警官殺害の容疑で、七人のアナキストが逮捕された。八人目の

左 カフェ・テルミナス爆破後、エミール・アソリの逮捕。





男、アルバート・パーソンスの場合は、法廷で、自分の無実を証明しようと、自ら警察に出頭したのである。しかし裁判は不公平な、一種の茶番劇であった。それは労働者のストライキを煽動し、革命を呼びかけていた人びとに対する体制側の復讐といってもよかった。

事実、いったい、だれが最初に爆弾を投げ込んだのかも究明しようとはせずに、全員が有罪を宣告されたのである。(真相は現在も不明のままである)

陪審員の偏見と悪意に満ちた有罪の決定に、裁判官は何の考慮も払わなかった。パーソンス、スピース、エンゲル、フィッシュヤーの四人が死刑、フィールデン、シュワップ、ニーフの三人が無期懲役を宣告された。

爆弾製造の専門家だったリングという男

は、刑務所内で、口の中で爆弾が破裂して死んでいるところを発見された。

この裁判の特徴は、被告のひとり、フィッシュヤーの言葉に要約されている。

「私は殺人罪で裁判され、アナキストという理由で死刑を宣告された。私は殺人罪で有罪を宣告されたのではないのだ！」

後に、一八九三年、新しく就任したイリノイ州知事は、事件の再調査を行ない、三人の無期懲役囚を無条件で釈放している。州知事は、当時の陪審員の心理状態が正常ではなく、彼らの法的能力を認めないとのべた。

当時、シカゴのアナキストは約三〇〇〇人いると推定されていたが、彼らのほとんどはヨーロッパ系であった。アナキストの機関紙のうち三紙は、ドイツ語で書かれていた。同時に、ヨーロッパから、続々伝わ

右 抗議集会をひらいているところへかけつけた警察隊に、爆弾が投げられた。ヘイマーケット事件。

る破壊行動のニュースに、アメリカ市民は、ますます国際アナキズムの陰謀だと考えるようになり、人びとは革命という言葉を恐れ、アナキスト狩りが方ぼうで行なわれるようになっていった。

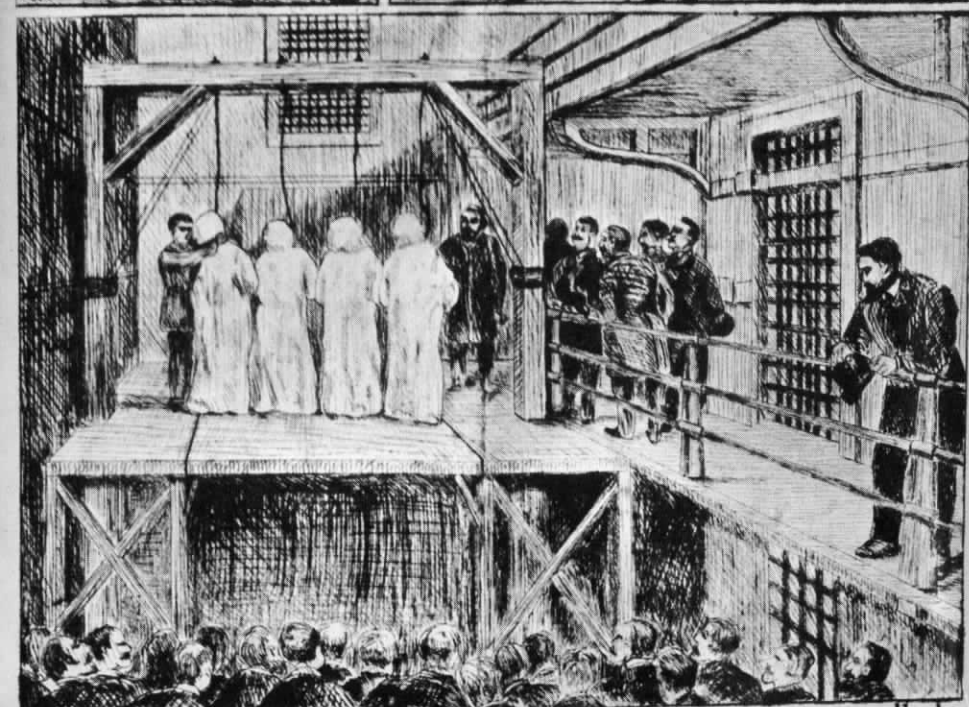
単独テロ

ヨーロッパでは、ちょうどそのころ、ラバコールが活躍していた。一八九二年、パリで起こったラバコールのふたつの爆破事件は、ひとりの死者も出さなかったが、人びとに大きなショックを与えた。

ラバコールは前の年の事件でふたりのア

Les MARTYRS de CHICAGO

EXÉCUTION DE PARSONS, SIMES, FISCHER, ET ENGEL, COUPABLES DE PROPAGANDE ANARCHISTE



ナキストに有罪の判決を下した判事を殺害するために爆弾を建物にとりつけたのだが、肝心の判事が何階に住んでいるかも知らなかった。

彼の破壊的暴力行為はまるで行き当たりばったりで、罪のない同じ建物の居住者を巻きぞえにする恐れがあるにもかかわらず彼はそんなことには無頓着であった。サンジェルマン通りに住める者は、みなブルジョア階級であり、彼らはみな、権力側、つまり敵だというのが彼の論拠だった。獄中で彼は、

「アナキズムに有害であるすべての人びとと戦わなければならない。住宅を爆破するのもそのためである。もしもアナキストが白昼堂々とブルジョア階級を打倒できるのであれば、爆破する必要はなくなるのだ！死刑の恐れがなくなれば、ダイナマイトを使う必要もない。我々の階級の仲間である、邸宅の使用人まで殺す必要はないからだ」と語っている。

要するに、彼の目的はすべての権力を根絶することにあつた。そして不気味な歌が生まれた。

ラバコールを踊ろう
爆弾よ永遠に！

そうだ、それでいい
すべてのブルジョアは風のように
吹き飛ばされる……………

すべてのアナキストがラバコールの行動に賛成したわけではなかった。バクーニン自身、このようなテロが彼の革命思想から生みだされるとは予想もしなかったであろう。そして、クロボトキンやマラテスタのような有力な指導者たちも彼らの行動を、「危険な道化」と呼び、単純なそして無茶苦茶なテロよりも、もっと全面的な変革を目的にしなければいけないと主張した。

しかし、このような穏健な指導者の声は、過激な行動のまえにかき消されてしまった。一般市民も新聞のセンセーショナルな報道のみでアナキズムを判断するようになっていったのである。

復讐はだれの手で

一八九三年から九四年にかけては、まさ

にアナキストの年であつた。一八九三年一月、スペインのバルセロナで爆破事件が起きた。テアトロ・リセオで、着かざった観客が「ウイリアム・テル」を見ている真最中に、爆弾が二発投げ込まれ、二〇人の死者が出た事件である。

この事件の犯人サンチャゴ・サルバドールは、同志パウリノ・バラスの復讐だと公言した。カンボス將軍暗殺未遂事件で死刑になった男、バラスは「復讐はひどいぞ！」と叫んで死んでいったのである。

しかし、権力側の復讐はさらにひどいものであつた。すぐに何百人にもおよぶアナキストが逮捕され、監獄に送られ、なんの証拠もないまま、数人が死刑を宣告され、ほかの多くは、バルセロナ近郊の悪名高いモンティックの監獄で拷問を受けたのである。

フランスでも、単独テロがくり返された。一八九三年一月に、オーガスト・ペーランという男が、くぎをつめた自家製の爆弾を下院に投げ込んだのである。死者はでなかったが、ペーランは死刑になった。

左 シカゴのアナキスト処刑のしよう

1. Parsons chantant dans sa cellule. 2. La marche au supplice. 3. Les martyrs, la tête enveloppée d'une cape blanche.

彼の処刑は賛否両論を呼び、なんんかの議員が助命を嘆願したが、無駄だった。

彼の処刑の一週間後、レ・マタン紙は、「ペーランの死の復讐、カフエ・テルミナスの爆破事件」を報道した。一八歳の少年エミール・アンリが、サン・ラザール駅の構内のカフェに爆弾を投げ込んだのである。

彼は才気ある学生であったが、「社会の醜さ」に病的なほど心を奪われていた。

「ペーランみたいに人を傷つけるだけではなく、少なくとも一五人ぐらい殺し、二〇人ぐらい傷つけたかったのだ。残念なことにと語りしか殺せなかった」

と語るのであった。

彼は死刑の宣告をいさぎよく受け入れ、処刑中止の嘆願まで断わり、一八九四年五月二二日、処刑されるまで、詩を書いたり、「ドン・キホーテ」を読んで過ごしていた。

一カ月後、リヨン市で、当時のフランス大統領カルノが暗殺される。犯人はイタリア人、サント・ジェロニモ・カセリオであった。

彼は大統領の馬車に近づき、一枚の紙片を大統領に渡すふりをして胸を刺したのである。彼は後に、「大統領が、ペーランの助命嘆願を拒否した復讐だ」と語り、法廷で、イタリアにもどつたら、

国王とローマ法王を殺すつもりだったと堂々とのべ、

「もつともふたりで一緒に外出することはないので、ひとりずつ殺すよりしようがない」

などと、ふてぶてしいジョークをつけ加えたのである。

その七年後の一九〇〇年、イタリア国王ウンベルトが暗殺されたとき、人びとはこ

の不気味なジョークを思い出した。

しかし犯人ガエターノ・ブレスチは、一八九八年五月に、労働者のストライキを弾圧した復讐だと語った。

暗殺は各国に飛び火し、スペインのカノバス・デル・カステイロ首相は、モンテイック監獄の同志の復讐を叫ぶイタリア人ミシエル・アンジェリーロの手で、ピレネー山脈にある彼の別荘のバルコニーで射殺された。

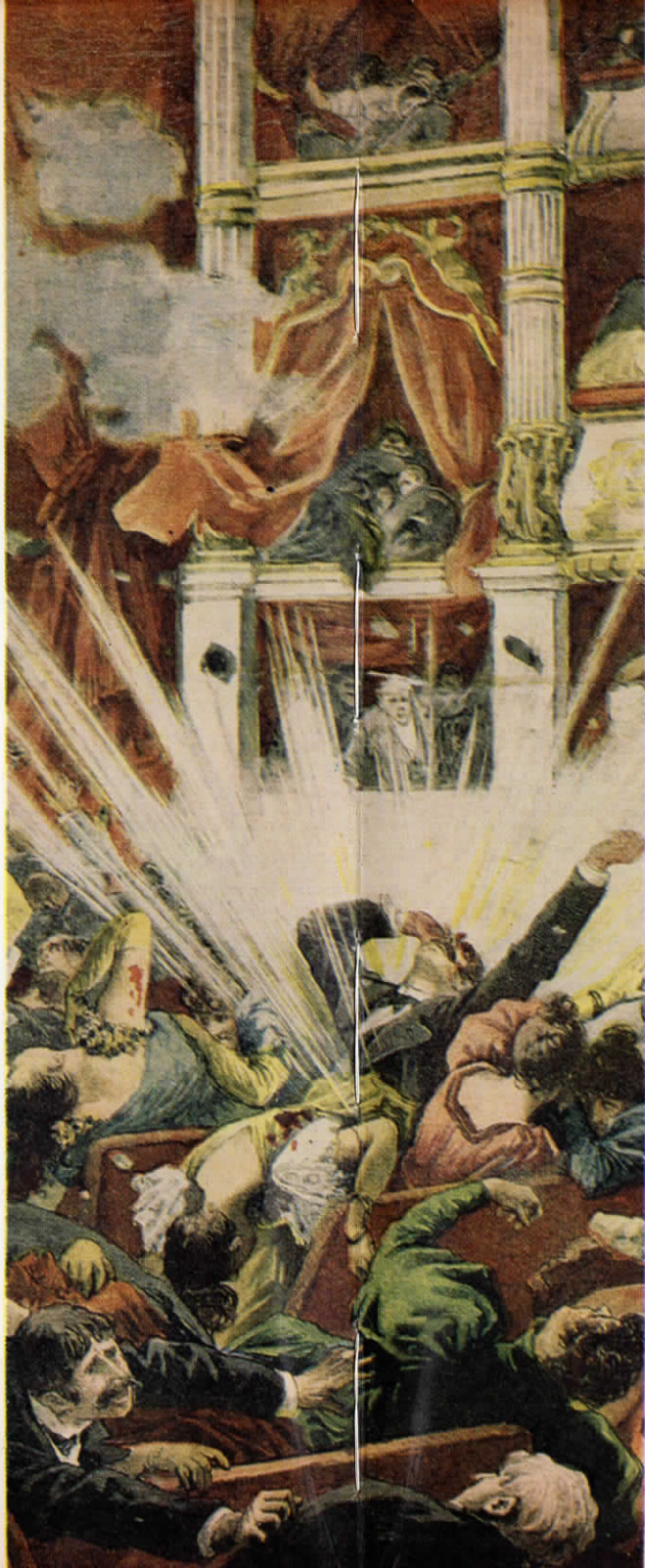
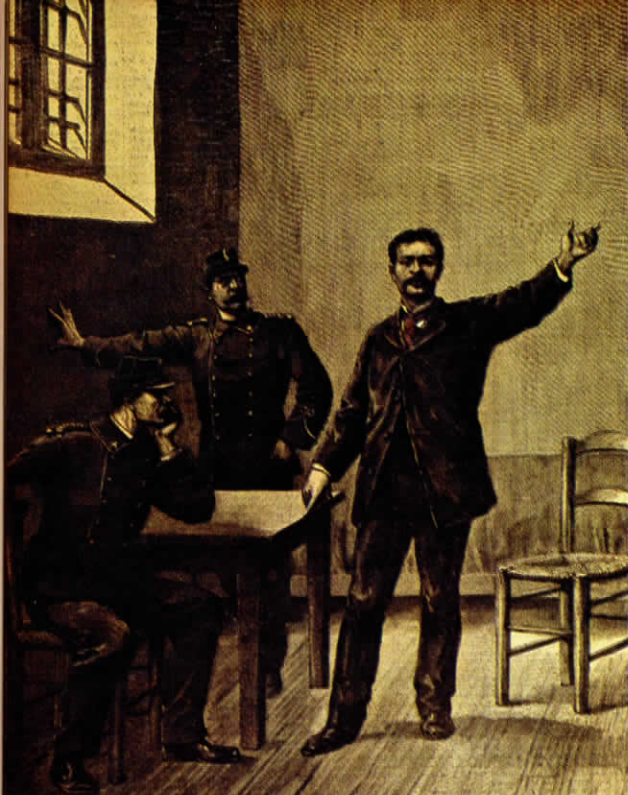
一方、アメリカでは、一九〇一年、当時の大統領マッキンレーが暗殺された。しかし、この事件はほかの暗殺のように、弾圧、

左下 警察の尋問を受けるラバコール。

左下 ギロチンにも負けないラバコールをひ

とつ象徴として画いたもの。

右 バルセロナのリセオ劇場で、「ウイリアム・テル」の上演中に爆弾が投げ込まれた。





右 一八九〇年、バルセロナで、六人のアナキストを処刑するもよう。このような残忍な迫害が、かえって彼らの抵抗を強めた。

暗殺(処刑)、復讐という一定のパターンに当てはめることはできない。犯人のレオン・ツオルゴスはポーランド系であること、そして、ロシア系アナキストのエマ・ゴールドマンの講演会に出ていたこと、このふたつの事実で、アメリカ人は、たんなる個人的なテロ行為だとは考えず、国際的アナキスト組織のしわざであると、ますます思い込んだのであった。

さらに、移民にアナキストが多いという理由で、暴力革命の輸入を拒むため、外国人の入国を規制する法案が制定され、外国系アナキストの追放がはじまったのである。

組織的反抗

ところで、ロシアでは、フランス、スペイン、イタリア、アメリカにくらべ、アナキストの登場はおそく、一九〇三年ごろになつてはじめて、アナキストが当時のロシアにおける革命勢力の重要な一部となり、かなり組織的な活動がくりひろげられるようになった。

一九〇五年にはいると、皇帝の兵隊が、労働者のデモに発砲したのがきっかけで、革命が起こつたが、この革命で「黒旗団」と「無権力同盟」というふたつのアナキストグループは、それぞれバイアリストークと、

ペテルスブルグに本部をおき、かなり組織的な破壊活動を行なつたのである。

ピストルと手製爆弾で武装したこれらの

グループは、体制側の混乱を利用して、官僚、資本家、地主など、要人の暗殺に成功したが、なかには、投げる前に爆弾が爆発して死んだり、逮捕を恐れて自爆したりする者も多く、かなり自己破壊的な行動もみられた。

オデッサのグループのように爆弾製造所を作っていたが、そこで爆弾を頭上にのせてダンスを踊ったりして、日夜騒いでいるだけといった退廃したアナキストもあらわれた。

非人間集団

ヨーロッパのほかの諸国では、アナキストによるテロは一九〇〇年を頂点に、しだいに減つていった。事実、センチシヨナ

ルな政治的事件に変わって、脱したアナキストのピストル強盗や、単純な殺人事件が見られるようになった。

一九一一年から一三年にかけてフランスを荒らしまわったポノ一味はそのいい例である。

ポノは、有名なギャング、アル・カボネのように、その一生は伝説で彩られるほどであったが、最後には、警官隊と派手な射ち合いの末、マットレスにはさまれたような状態で射殺されたのである。

もはやラバコールの時代のように、個人テロを英雄視する風潮はなく、アナキストの間でも共感者は非常に少なくなっていた。

英雄視する風潮は、一九世紀の終わりはブルジョア社会の終わりだと、心から信じていた。一八九〇年代のことである。まして一般市民にとっては「たんなる非人間的

行為」以外のなにもでもなかった。

たしかに、破壊的アナキストの行為は、権力に対する攻撃であるという意味で、恐怖を与えていたのだが、それ以上に人びとがアナキストを「非人間的集団」と見るにいたった理由は、第一に、彼らの行動が、国際的組織による全人類に対する脅迫であると信じられていたためである。

また、この解釈は、同時に、スラム街やゲットーに見られる彼らの社会の貧困と不平等を、自分たちの責任とは考えず、目をつぶっていた人びとにとって、都合のいいものであった。

今でこそすべての歴史家は、アナキストの組織がバラバラで、暴力行為も、首尾一貫した目標がないということを知っているが、当時、国際テロ組織であるブラック・インターナショナルが、実体のないものだ

とは、だれも考えず、政府、資本家を含めたすべての人が、国際的アナキストの陰謀だと本気で信じていたのである。

まえにものべたように、ヨーロッパとアメリカでまったく偶然にも、同時に進行した暗殺事件によって、人びとはアナキストの破壊活動が特定の国、特定の権力に向けられているのではなく、すべての国、すべての権力を対象にしているのだと思っ

た。そして、「次に狙われるのは誰か？」このような不安が、すべての国のすべての政治家を恐怖におとしれていた。

アナキスト非難の第二の理由は、突発的なイメージの強いこの暴力行為は予期できない死を引き起こすからである。

左 ポノの最期。マットレスにはさまれた形で、警官に射殺された。





右
レオン・ツオルゴスが一九〇一年、米
国
マッキンレー大統領を暗殺した。

事実、十七世紀の思想家トーマン・ホッブスの言葉を借りると、人間がもつとも恐れるのはたんなる死ではなく、暴力的な死、それも予期せぬ死なのである。

人類はこの恐怖心を利用して「殺しのルール」を作り出している。戦争、裁判制度、奴隷制度などは、念入りに準備された儀礼的、法制的な「殺しのルール」にのっとっているのだ。

一八七一年のバリ・コンミュニョンの大量処刑、第一次大戦の何百万人も死は、みなこのルールにのっとっているのである。しかし、アナキストたちはこの「殺しのルール」を無視したため、人びとは彼らの行動を気狂い呼ばわりし、「非人間」と呼んだのである。

人びとがアナキストを非難する第三の理由は、彼らの暴力が、人間の本性に対する

反抗だということである。権力の集中は、人間にとつて、むしろ自然な現象であり、父親が家族全員に対して自然に権力を持つように、よりすぐれた人間がほかの人間を治めるのは当然なことと考えられていたのである。

一方、この必然性を否定するアナキストは、自然と人間に対する反抗者であり、彼らの破壊行為は自然をぶちこわす途方もない自暴自棄な行動とみなされたのである。心理学者ロンプロソはアナキストのテロは一種の「人間的な自殺行為」であるときえ解釈した。世の中に絶望しても自殺する勇気がないため、死刑になると知りながら殺人を犯す異常な行為であると判断したのである。

それでは、アナキストたちはこれらの非難に対し、暴力をどのように正当化したの

であろうか。

エミール・アンリというアナキストが、死刑を宣告されたとき、イギリスの「ザ・アナキスト」紙は、次のような社説を掲げた。

「エミール・アンリのような人間は、あるいは、間違っているかもしれない。しかし少なくとも彼は、自分と社会とに誠実である。自分の命を自分の信じる主義のために捧げるくらい誠実なことはないだろう。ラバコール、パラス、ペーラン、そしてアンリのような人たちは、その良い例である。

我々はブルジョア階級の諸君に告げる！もし、アンリたちが「化け物」なら、その「化け物」を作り出したのは諸君なのだということをし！自分の欲に目がくらんで多



右 ロシアのアナキストは、ほかの反帝運動とともに戦った。写真はストルピン首相の暗殺をくわだて、失敗したときのもよう。その後ストルピン首相は一九一一年に暗殺された。「あなたの赤い法衣と同じだな！」
と叫び返した。

彼らはバクーニンの有名な定義「破壊欲は創造欲と同一のものである」という言葉に賛同して、自分たちの破壊行動を建設的なものとしてとらえていた。炎と灰の中から新しい創造が生まれると信じていたのである。これは西洋思想に特徴的な「復活」思想と同じ流れのものである。彼らは自分たちを、「復活」のための殉難者だと考えていたからである。

ラバコールは、破壊活動から人類の黄金時代が生まれると信じていた。彼の未来のビジョンは、彼の行動に反対する人びとからも支持されていた。

スト」は、「ラバコールに捧げる——フランス共和国のブルジョアに雇われた死刑執行人の手で、モンプリンソで殺害された我がの同志ラバコールの思い出」という記事の中で、「ブルジョアがあらしの種をまいたのだ。彼らがそのあらしの被害を受けるのは当然だ」と書いている。

テロは彼らにとって「復讐」であり、同時に正当防衛なのだと言張るのであった。

おまえの手は血だらけ

このように「我々の暴力は社会的暴力の影なのだ」ということがアナキストたちの考え方である。エミール・アンリは、法廷で判事に「おまえの手は血にまみれている」といわれたとき、

くの人びとを虐殺したり、しいたげている諸君が作り出したのだ！ 貧しい者の血の中から復讐者が生まれても、いまさらおどろくことはないだろう。人を殺すのは正しいことなのか？ 罪のない人を富と権力を得るために殺すのは正しいことなのか？ もし正しいとしたら、罪のない人びとを殺したその人間を殺すのも正しいことになる。労働者を搾取し、虐殺して得た富で豊かな生活をしているすべての人間に、その責任がある。我々のこの近代文明は、虐殺された奴隷の死体の山の上に建てられたモロツコの寺院と同じだ。テロリストにやりたいことをやらせる。彼らの行為は、今まで征服者が犯した大きな罪にくらべれば取るに足らないことなのだ」

この発言はアナキストの代表的な意見である。フランスの過激な機関紙「マニフェ



彼のいう黄金時代は、
「もはや戦争、喧嘩、嫉妬、盗み、暗殺、
警察、判事、権力者、すべてのない社会」
(彼自身の言葉)であった。

ペーランは、ラバコール以上に自己を正当化していた。一三歳のとき、彼は無賃乗車でパリに來たのだが、そのとき駅員に見つかり、家庭裁判所に連れていかれたが、両親は彼を引き取ろうとはしなかった。幼い彼に孤獨な極貧生活がはじまったのである。彼は二回、軽犯罪で入獄したが、その間、独学で自然科学、天文学、哲学を学び、やがてアナキストグループにはいり、自由主義的思想に強い情熱を持つようになった。一時、南米に移住したが、貧しいまま、一八九三年に帰国、そしてあの国会爆破事件を起こしたのであった。
彼は法廷で、

「私は不幸な人びとが資本主義の重圧にあえいでいるのをいたるところで見た。いたるところで人びとの傷と涙を見てきたのだ。この苦しみに満ちた人生に疲れて、その原因を作っている責任者に爆弾を投げつけたのだ。爆弾は私ひとりの叫びではなく、権利を奪われた階級全体の反抗の叫びなのだ」と陳述し、「一〇〇人も議員が負傷して床に倒れていた」と誇らしげにつけ加えるのであった。彼の言動は自分を殉難者とみなす多くのアナキストの典型であろう。

ほとんどのテロリストは、組織活動とは無縁であり、孤立した個人行動しかしなかったが、彼ら自身、自分たちを孤立しているとは思ってもみなかったのである。

パラスは、「この仕事を続けるのは何千人といる」と叫び、アンリは、「私の首が君たちの切り落とす最後の首じゃない」と

右 フランスの下院に爆弾が投げ込まれた。死者はなかったが、犯人ペーランは後にギロチンにかけられた。

つぶやいた。そしてウクライナ(ロシア)のマトレーナ・ブリジャンニクは、「誇り高く、勇気を持って私たちは絞首台にのぼる。私たちの死は熱い炎のように多くの人びとの心に革命の火を灯すだろう。私たちは勝利者として死んでいくのだ! 限りなき前進! 死は私たちにとって『勝利』にほかならない!」と叫んだのである。

このようにアナキストのテロは「歴史が認める人間の正当な権利としての反抗なのだ」という彼らの主張なしに理解できない種類のものであり、やがて、彼らの主張は「暴力は革命の助産婦である」と伝えられていくのであった。